

Philomusica Orchester Kyoto

BRUCKNER
SINFONIE Nr.9 D-moll

9

SCHOSTAKOWITSCH
SINFONIE Nr.9 Es-dur

京都フィロムジカ管弦楽団
第12回定期演奏会
2002年12月8日(日)
京都コンサートホール

ごあいさつ

本日ここに「京都フィロムジカ管弦楽団」第12回定期演奏会を開催するにあたり、ご多用にも拘わらず、多数の方々のご来場をいただきまして、誠にありがとうございます。

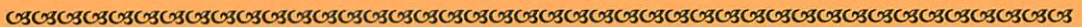
今回は特に2年に一度の大規模演奏会にあたり、第8回定期演奏会にも指揮していただきました金子建志氏のご指導のもと、団員が一つとなって努力と研鑽を積み重ね、本日ここに大曲を披露してくれるものと期待致しております。皆様には、その努力の結実を演奏の中にお聴きいただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、「京都フィロムジカ管弦楽団」の為に、物心両面にわたるご支援を賜りました皆様方をはじめ、ご指導下さいました先生方に厚く御礼申し上げますと共に、定期演奏会のますますの発展を祈りまして、ご挨拶とさせていただきます。

京都フィロムジカ管弦楽団顧問 和田 之宏

「シンフォニーオーケストラはブルックナーを演奏するためにある」と言った人がいます。ベートーヴェンの第九は演奏する前から成功が約束されているが、ブルックナーだけは当日演奏してみないとどうなるかわからない、というわけです。作品に秘められたものを演奏でうまく表現できて初めて感動が生まれるという、オーケストラにとって最もやりがいのある作曲家のひとりがブルックナーでしょう。私たちはこれに挑戦できることを誇りに思います。ブルックナーの研究で有名なノヴァークはこの第九番を、この世のものとは思えないと言っています。きょうは自分たちなりにこの作品に敬意を払い真摯な気持ちで演奏します。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

京都フィロムジカ管弦楽団団長 長岡 武志



京都フィロムジカ管弦楽団 第12回定期演奏会

ロビーコンサート (1:15より)

ドミトリイ・ドミトリエヴィチ・ショスタコーヴィチ／交響曲第9番変ホ長調
Дмитрий Дмитриевич ШОСТАКОВИЧ Симфония №9
I. Allegro II. Moderato III. Presto IV. Largo V. Allegretto

—休憩—

ヨーゼフ・アントン・ブルックナー／交響曲第9番ニ短調

Josef Anton BRUCKNER Symphonie Nr. 9 d-moll

- I. feierlich, misterioso (荘厳に、神秘的に)
- II. Scherzo bewegt, lebhaft (動きを持って、生き生きと) —Trio Schnell (速く)
- III. Adagio langsam, feierlich (ゆっくりと、厳かに)

2002年12月8日 午後2:00開演 京都コンサートホール大ホール

指揮：金子 建志

※携帯電話、ポケットベル、アラーム付き腕時計などの電源はお切り下さい。

また、客席でのご飲食・喫煙はご遠慮下さい。

※写真撮影、録音、録画はお断り申し上げます。



ロビーコンサート

シャルル・グノー (Jane Whally 編曲) / 「小交響曲」 Petite Symphonie より

第3楽章 Allegro moderato 第4楽章 Allegretto

Fl.江藤 Ob.中西 Cl.田中 Hrn.片山 Bsn.塚田

「アヴェ・マリア」でお馴染みのフランスの作曲家グノー (1818~1893) の作品です。原曲は木管9重奏 (Fl、2Ob、2Cl、2Hrn、2Bsn) なのですが、今日は木管五重奏編曲版にて演奏します。一般的な交響曲の形である4楽章形式をとっているこの曲の中から、ホルンが狩を告げるような勇壮な動機から始まる第3楽章と行進曲風の堂々とした第4楽章をお楽しみください。(江藤)

アントン・ブルックナー (Klaus Winkler 編曲) / 「後奏曲」 (原曲オルガン)

Tp.遠藤、渡辺 Hrn.坂口 Pos.宮下 Tub.塚田

僕はこの曲のオルガンでの演奏を聴いたことがありますが (ブルックナー9番の演奏会でのプレ・コンサート)、オルガンだと純正調の和声が出せないため、どうしても和音が濁ってしまうのが気になりました。今回のようにアンサンブルに編曲した方が、あるいはブルックナーの望んだ響きになるのかもしれませんが。ブルックナーがオルガンよりもオーケストラに多くの作品を残しているのも、オルガンの限界をも知りぬいたオルガンの大家ならではと言えるでしょう。(遠藤)

リヒャルト・ワーグナー / 楽劇「ローエングリン」より “エルザの大聖堂への行列”

Hrn.坂口、芦原、片山、安田 T-tub.呉、名取 B-tub.吉野、白木

「海外版鶴の恩返し」とも称されるワーグナーの楽劇「ローエングリン」。本日は第2幕で演奏される「エルザの大聖堂への行列」を、ホルン4本と彼自身が設計したとされるワーグナーチューバ4本による8重奏でお届けします。珍しい楽器の独特な響きやホルンとの音色の違い、アンサンブル/音程の妙味などを間近で感じていただければと思います。(“ホルン軍団”)

アントニオ・ヴィヴァルディ / 協奏曲集「四季」より協奏曲第4番「冬」RV.297 (全3楽章)

Vn. solo 天澤 Vn. 田村、越後、西村浩、川島仁 Va. 松浦、下川 Vc. 小野田、菊地 Kb. 今城

「冬」という通称で呼ばれていることから分かるように、全体的に暗い雰囲気漂う曲です。でもその中であって第2楽章は、多くの人に親しまれている暖かい雰囲気の音楽です。日本でも、この第2楽章に歌詞をつけて歌われることがあるほどです。どうぞお楽しみください。(西村)

指揮者紹介

金子 建志 (かねこ けんじ)

1948年3月8日、千葉県富津市生まれ。70年3月、東京芸術大学音楽学部楽理科卒。音楽理論を柴田南雄氏に、指揮法を高階正光氏に師事。

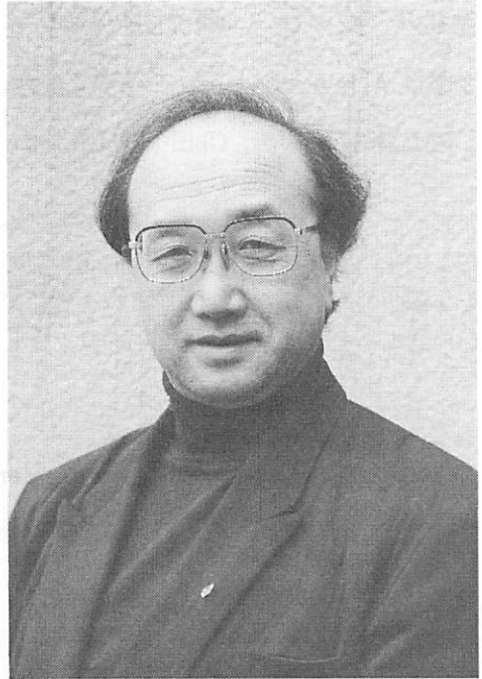
芸大在学中より、母校の千葉高校管弦楽団、千葉大学管弦楽団他の指導を皮切りに、市川交響楽団、世田谷交響楽団、千葉フィルハーモニー管弦楽団、19世紀オーケストラ、アンサンブル『花火』等のオーケストラの指揮者を歴任。

専門は古典派から近現代の交響曲・管弦楽曲の資料比較を中心とした研究と、その実践としての指揮活動。

NHK・FMのクラシック番組の解説、朝日新聞『試聴室』、レコード芸術、音楽現代のCD評等を担当。著書に音楽之友社“こだわり派のための名曲徹底分析”シリーズの『ブルックナーの交響曲』『マーラーの交響曲』『マーラーの交響曲・2』『ベートーヴェンの〈第9〉』『交響曲の名曲Ⅰ』、立風書房“CD200シリーズの『オーケストラの秘密』等がある。

尊敬する指揮者はクナッパーツプッシュ、フルトヴェングラー、ムラヴィンスキー、バーンスタイン、チェリビダッケ、C. クライバー。

現在、静岡の常葉学園短期大学教授。



『〈9番〉の遺伝子 (DNA)』

ベートーヴェンの不滅の9曲の後、交響曲を作曲しようという作曲家は9番目の交響曲を作曲する際に、ある種のプレッシャーを感じていたと言われる。その際、引き合いに出されるのは交響曲が9番で終わっているシューベルト、ブルックナー、マーラー、ドヴォルザークあたりだ。

ハイドンやモーツァルトが最初期の交響曲を書き始めた頃(18世紀)は、そもそも交響曲=シンフォニアは、作曲家がその能力の全てを注いで、そこに自分自身の芸術家としてのモニュメントを残そうと気負うようなジャンルでは全くなかった。それを象徴しているのが交響曲の数で、ハイドンが100曲以上、モーツァルトが40曲以上も書いたのに、ベートーヴェンが9曲と激減していることから分かる。番号付けも後世の研究者が整理して付けたものだから、仮に天国のハイドンやモーツァルトに「貴方の9番目の交響曲は」と問いかけても、どれのことやら返答に窮してしまうことだろう。

シューベルトの場合は未完成の交響曲が非常に多く、それが番号づけの障害になっている。(グレイト)と呼ばれる最後の交響曲・ハ長調を〈9番〉とするのが一般的だったが、従来『完成された交響曲』の方に含む形で〈7番〉とされていたホ長調を、近年はその完成度の低さから除外すべきということになり、その後の2曲を繰り上げ、ロ短調の〈未完成〉を〈7番〉、(グレイト)を〈8番〉とするようになった。

こうした事情も含めて、『〈9番〉を書いて世を去った』という〈9番〉にこだわった言い方自体に、意味がないことは分かるのだが、最後の〈グレイト〉を作曲していた頃は病による体調の悪化から、死を意識していたのは確かなのだ。それは第2楽章の後半部に現れている。散策する『流離い人』を

思わせるように始まるこの楽章は、富士山型の頂上に辿り着いたところで突然中断する。悲劇の頂点で望みを断たれるその構図を、ブルックナーは〈9番〉のアダージョ楽章で応用。12音技法を先取りしたかのような不協和音を炸裂させ、より強烈に絶望のイメージを刻印するのだ。この『断ち切られた望み』という構図は、更にマーラーの〈9番〉の第4楽章にも受け継がれる。その断裂の後、諦めたような思いの中に結ばれるのも同じだ。

ドヴォルザークも違った意味で面倒な問題を抱えている。近年は〈新世界より〉を〈9番〉とするのが定着しているが、筆者が音楽を聴き始めた頃は、生前に出版された曲だけをカウントして付けられた〈5番〉だった。今でも図書館等に行くと〈5番・新世界〉と印刷された古いスコアを見る事ができる。ドヴォルザーク自身が、ナンバリングをどう考えていたかは〈新世界〉の自筆スコアの表紙に記されたメモが重要資料。そこでは過去の7曲がリストアップされ、〈新世界〉は〈8番〉とされているのだ。これは、現在〈1番〉とされる〈ズロニツェの鐘〉がカウントされていないからだ。ドヴォルザーク自身が、初期の習作と見做して『価値観』から除外したのか、当時スコアが失われたままになっていたのかは不明である。

ブルックナーは、初期に、後の研究者が〈00番〉(ダブルゼロと言われたりする)とした『ヘ短調』と、〈0番〉とした『ニ短調』があるが、この場合は作曲家自身が、習作と見なして番外扱いしていたことが原因なので、ブルックナー自身が今晚演奏される未完成の交響曲を〈9番〉と見做していたのは明らかだ。しかもベートーヴェンの〈第9〉と同じニ短調という調性を選んでいるあたりも重要で、ブルックナーに関しては『〈9番〉プレッシャー説』が、多少とも当てはまるかも知れない。未完に終わった直接的な原因としては〈9番〉に着手する直前に完成したばかりの〈8番〉を、最も信頼していた指揮者のレヴィに否定されて書き直しを始めたことが指摘される。更に、他の初期作の改訂も行ったために、大幅に時間を割かれることになったのが、〈9番〉が未完に終わった原因の一つなのは確かだ。

ブルックナーの〈9番〉の第4楽章は、近年になって、従来考えられていたよりも、完成されていた部分が多いということが判ってきた。ブルックナーがベルベデーレ宮の住居で亡くなった後、関係者が〈9番〉の未完の草稿を遺品として少しずつ持ち去ったことが原因らしい。現在発見されている草稿から想像できる全体の流れは、スコアとして完成された冒頭の状態が徐々に崩れ、部分的なオーケストレーションのみの箇所や、空白の小節が次第に増えてゆく。一番の問題はコーダの資料が無いこと。ただしブルックナーの場合、第1楽章の第1主題がフィナーレの最後に長調で再現され、神を讃える形で結ばれるのを定型にしていたため、その公式を応用した形で第三者が補筆完成することはある程度可能だ。そのため、近年、幾つかの補筆完成版が作られているが、去年は、その一つが日本でも初演された。

『その一つ』というのは、ただし書きが必要。国際ブルックナー協会が〈9番〉の新版出版と補筆完成に携わっているコールズが、自身の見解を加えた独自の版を自ら指揮した日と、彼を含めた複数の音楽学者・研究者によるチームが公式見解として刊行しようとしている版をヘレヴェッヘが指揮したの日とがあったのだが、大筋としてはほぼ同じ両版を聴いた印象は以下のとおりだ。

ブルックナー自身が書いた部分は、たとえ単旋律でも非常に個性的で、いかにもブルックナーの曲という感じを与える。中間部で奏でられるコラールは実質的には単旋律なのだが、それをフル・オーケストラで聴くと、紛れもなくブルックナーでしか書けない音楽だという説得力がある。逆にブルックナーの典型的な手法の一つであるゼクエント進行(同じ音型を繰り返しながら少しずつ転調してゆく)や、全休符で間(ま)を空けて全く新しい楽想に移るといったブルックナー休止などは、補筆完成者の仕事を楽にするかのように見えるが、第三者が真似ると、手抜きの編曲にありがちなブリッジや、ぶっきらぼうな分断といった印象を与えてしまうのだ。タルミ、インバル、アイヒホルン等のCDによる諸版よりも、煮詰められているのは確かだし、実演で増すインパクトの強さにある程度は納得したものの、あのアダージョ楽章の後に、補筆版の第4楽章を聴いた場合の落差は(ヘレヴェッヘは、その形で全曲演奏したのだが)モーツァルトの〈レクイエム〉以上に大きいと言わざるを得ない。

マーラーは〈9番〉で終わりになるのを恐れて、実質的には9番目の交響曲になるはずの〈大地の歌〉に番号を付けなかったが、無事関門を通過した?ので〈9番〉を完成。そして未完の〈10番〉を残して亡くなった。番号が一つ後ろにずれこんでいるが、同じように、未完の交響曲の膨大な遺稿を残して世を去ったという点に関してはブルックナーと同じだ。但しマーラーの〈10番〉の場合は、クック等の資料研究によって（実質的には単旋律になってしまう部分も多いが）全体の流れをほぼ再現できるようになったため、復元率が高いのだ。筆者はクックによる5楽章完成版を振ったことがあるが、ブルックナーの〈9番〉の4楽章完成版を振れと言われたら、二の足を踏んでしまう。幸い今回フィロムジカ管弦楽団から指揮を依頼された際、4楽章完成版のオファーは無かったのでほっとした。仮に、ブルックナー協会が出す予定のスコアを入手して演奏するにせよ、かなりの加筆修正をしなければならぬからだ。いずれにせよ、現段階ではコーダが、第三者による完全な創作・作曲になってしまうので、将来、もう少し何かの資料が発見されるのを期待するしかあるまい。

その代わりにフィロムジカが提案してきたのはあらゆる〈9番〉の中で最も陽気でパロディックなショスタコーヴィチのそれだった。ショスタコーヴィチはシューベルト、ブルックナー、マーラーのように病による自らの死を意識していたことはない代わりに、戦争や政治による不条理な死、それも人類史上最大最悪の大量殺戮の最中に身をおいていた。人々はもちろん、自らの命も政治的な国家反逆者として断たれる恐怖や、不条理に対する告発の姿勢は、〈4番〉から〈8番〉までの交響曲にリアルに反映されている。独ソ戦が勝利に終わった時、人々がこの当代随一のシンフォニー作曲家に期待したのは〈5番〉や〈7番・レニングラード〉を受け継ぐ『闘争勝利型』の大交響曲だったはずだ。しかも〈9番〉という交響曲は、シンフォニー作曲家なら誰もが自らの作曲家としての全てを注いで書くシリアスな本格的大作というイメージがある。それらをショスタコーヴィチは完全に覆し、プロコフィエフの〈1番・古典交響曲〉のようなギャグ系の交響曲を書いたのだ。この交響曲はヒトラーを倒したのがスターリンだったという構図を、洞察力の鋭い当事者がどう捉えたかを示している。ピエロが笑いを仮面にして本音を語るという図式や、〈ボリス・ゴドゥノフ〉等でも登場するロシア特有の『白痴=聖愚者』が真実を訴えるというパターンがベートーヴェンの〈第9〉のレチタティーヴォを引用する形で巧妙に使われていることを指摘して結びとしたい。

ベートーヴェンの〈第9〉終楽章の序奏部は低弦によるレチタティーヴォが、前3楽章を次々に否定して『歓喜の主題』を導くのだが、ショスタコーヴィチは、その役割を終楽章への長大な序奏部といった形をとる第4楽章でモノログを奏でるファゴットに託した。

譜例①はベートーヴェンの〈第9〉第4楽章56小節。戯画的な性格を持つスケルツォ楽章の回想を低弦が否定する部分である。ワインガルトナーが述べているように、ドイツ人なら冒頭に「n i c h t d o c h ! =いや、しかし!」という言葉を連想する音型だ。ショスタコーヴィチはこれを譜例②のようにファゴット・ソロの冒頭に引用した。前楽章はベートーヴェン以上にアクロヴァティックに誇張されたスケルツォであり、そのサーカス芸で喝采を浴びたピエロが、ここから仮面を脱ぎ捨てて、本音を告白するのである。

平成14年12月8日 金子 建志

Vc. e B. *f* *dimin.*

譜例① ベートーヴェン〈第9〉 第4楽章56小節～

※冒頭の「ファ・ド (F・C)」は音高まで全く共通である。

Fag. *I solo* *sempre* *f cspress.* *p* *f* *mf dim.* *p*

譜例② ショスタコーヴィチ〈第9〉 第4楽章10小節

香雲

ミニコンサート 大原

音楽と自然の音と朗読、
そして香りが織りなす
ヒーリング世界に皆様をお招きいたします。

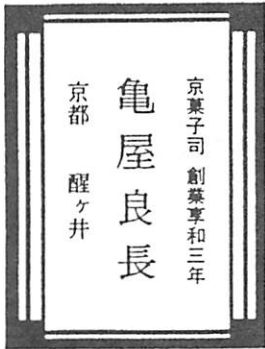
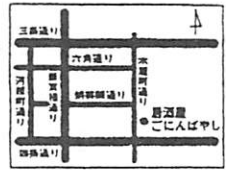
企画/お問い合わせ先
プランニングオフィス プロシップ
TEL/FAX:075-811-9120
<http://www.pro-ship.com/>



4~100名 宴会受
中・木屋町四条上ル
☎(075) 221-3517



PM 5:00~深夜12:00
(土・祝日前~AM 2:00)



KAMEYA YOSHINAGA
Kyoto Samegai
since 1805

京菓子司 創業享和三年
亀屋良長
京都 醒ヶ井

合宿・研修に、ぜひどうぞ!!

びわ湖 千鳥荘

滋賀県滋賀郡志賀町南浜 403

Tel/Fax (077) 594-0035

サークル合宿・ゼミ旅行・スキーに
海外旅行まで、全てお任せ下さい

面倒な施設の予約から交通機関まで
一切の手続きを代行致します。



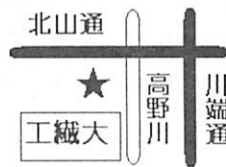
日本教育旅行株式会社
京都府知事登録国内旅行業第2-6号

お問い合わせは…
TEL.075-351-0405 FAX.075-371-7739
フリーダイヤル 0120-040-566
e-mail fwnet@nyc.odn.ne.jp



年中無休 お弁当・コロッケ

営業時間
10:00-24:00



北山店

Tel:075-723-0573
Fax:075-723-0574

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ 輸入・販売・修理・調整・製作



イタイヒロキ Violin Workshop

～狂風社をもっと知り、楽しむ人に～

楽器の音色の美しさ、するどさ、しなやかさ、表現の多様性から広がっていく音の世界、
イタイヒロキViolin Workshop はより深みのある、新鮮な音を目指して、あなたをサポートします。

◆イタリア、ドイツ製ヴァイオリンなど直輸入、品質には自信のある楽器や弓を
良心的価格で揃えています。まずは手にとって弾いてみる。

◆送料は3割引、通信販売もOK、通販規定は <http://violinshop.jp> にて、
ケースその他、特価品有り、おたずね下さい。

営業時間のお知らせ
am. 10:00 ~ pm. 7:00
定休日 (火・水)

◆京都店 〒600-0025
京都府上京区西京町今出川上ル角町311
◆Tel:075-251-0724
◆携帯電話:090-2820-0903
◆e-mail: info@violinshop.jp



<http://violinshop.jp>

Violin Shop

VIOLIN VIOLA CELLO & BOW 販売・製作・修理・調整

渡辺弦楽器

京都店 京都市中京区烏丸川上ル福住町728-4 ☎075-211-0116
夙川店 西宮市大井手町7-22 ☎0798-70-2006

曲目解説

ショスタコーヴィチ／交響曲第9番変木長調

きょうは1945年11月3日、ここはレニングラード・フィルハーモニー大ホールである。今まさにショスタコーヴィチの第9交響曲が初演されようとしている。客席ではこんな会話がなされているかもしれない。

客A「いよいよ9番の初演ね。わたし5番もここで聴いたのよ」

客B「あら、ついてるわね」

客A「ベートーヴェンもそうだけど9番ていうのは大作曲家には特別なの」

客B「ふうん、あなた詳しいのね」

客A「きょうは何でも合唱つきの大曲だっていうウワサよ」

客B「本当？でも合唱団なんていないじゃない。それに楽器の数も少なくない？」

客A「そういえばそうね」

客B「大曲だなんて言っておいて実は冗談みたいな曲じゃないの？」

客A「まさかあ そんなの当局が絶対許さないわよ」

客B「指揮者が出てきた。いよいよ始まるわ」

(曲目推薦者：Hrn.. 長岡 武志)

ブルックナー／交響曲第9番二短調

ブルックナーの生涯

ブルックナーは1824年にオーストリアの小さな農村で生まれた。父親は教師だったが、家の隣にある教会で礼拝があるときはオルガンを弾く役割をも負っていた。この父の影響から、ブルックナーは幼くしてカトリックへの深い信仰心とオルガンへの造詣を深めていく。また、父は酒場でヴァイオリンを弾くアルパイトもしていたため、田舎の民衆の音楽もブルックナーの身近に溢れていた。田園風景を想起させる悠然とした広がり、気高い信仰心に溢れた賛美歌風の主題、オルガンを思わせる崇高な響き、そして時折垣間見られる田舎風の陽気な旋律、いずれもブルックナーのあらゆる作品に共通する特徴であるが、これらは生まれ故郷で家庭の中で育まれたものなのだ。

ブルックナーは13歳のときに父親を失う。ブルックナーが後年、巨大な交響曲を作曲するのは、幼くして失った父親像を作曲によって代償していたのではないかとする説もある。父の死後、ブルックナーは生地に近い聖フローリアン修道院の寄宿学生となり、カトリックへの信仰を一層深めていった。また、この聖フローリアンの教会に巨大なオルガンがあったこともオルガニストとしてのブルックナーにとって重要な経験になった。

成人したブルックナーはいったん教師となるが、オルガン演奏の非凡な能力を生かして大都市リンツの教会オルガン奏者の職を得、あわせて作曲を本格的に学び始める。さらに、音楽の都ウィーンに生活の場を移し、オルガン奏者として、音楽の教育者として、合唱の指導者として活躍する。しかしながら肝心の作曲家としてのブルックナーは不遇であった。ミサ曲など宗教的声楽作品の作曲家とし

ては名声を博したものの、彼の交響曲は激しく非難された。ブルックナーの交響曲が不人気だった原因は、後で述べるようにあまりにも個性が強すぎて当時の聴衆に理解されなかったことであろう。それに加えて、ヴァーグナーを尊敬していたがために反ヴァーグナー派の音楽家に嫌われたことも彼の不運な点だった。ブルックナーの交響曲がウィーンで成功を収めるのは、晩年、第8交響曲が初演されるまで待たねばならなかった。ブルックナーはその後も休むこと無く第9交響曲の作曲を続ける。しかし、ブルックナーの体は既に病魔に蝕まれていた。病身に鞭打って作曲を続けるが、ついに第4楽章の完成を目前にしながら1896年に72歳で亡くなった。ブルックナーはこの第9交響曲を「愛する神」(dem lieben Gott)に捧げることにしていた。信仰心の篤いブルックナーにとって、交響曲の作曲は神の賛美にほかならなかったのだ。

版の問題

この第9交響曲はブルックナーの死後、弟子のフェルディナント・レーヴェの指揮で初演されたが、レーヴェはブルックナーの作品をわかりやすくしようとする配慮から大幅に編曲して演奏した。このレーヴェの編曲した楽譜とブルックナーのオリジナルの楽譜を見比べると、ブルックナーのどういった点が当時の聴衆に理解されなかったか、裏を返せばどういった点がブルックナーの独創性だったかが見えてくる。

・流麗でない表情記号

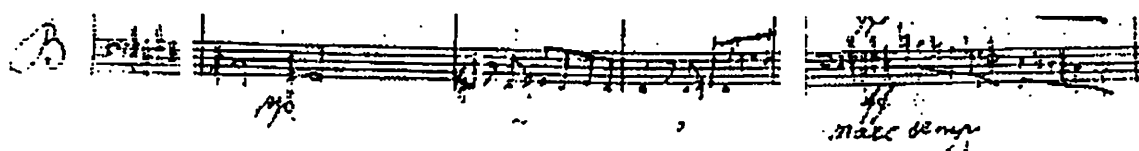
ブルックナーのオリジナルではアクセントを多用したごつごつとした印象を与える表情記号が使用される箇所が多い。レーヴェはこうした場面をスラーを多用した流麗な表情に変更している(譜例①)。レーヴェ版が華麗な印象を与えるのに対し、ブルックナーのオリジナルは豪快で野性的な魅力を持っている。

譜例①a ブルックナーの自筆譜
第3楽章 231小節～

譜例①b レーヴェ版・第3楽章 231小節～
アクセントが外されスラーが追加されている。

・極端な強弱変化

ブルックナーのオリジナルには *pp* が *f* に (あるいはその逆に) 突然変化する極端な強弱変化が指定されていることが多い。レーヴェはこれをクレッシェンドやディミヌエンドを多用して緩やかな強弱変化に編曲している(譜例②)。この場合もレーヴェ版が流麗な印象を与えるのに対し、ブルックナーのオリジナルは豪快で原始的な魅力を持っている。



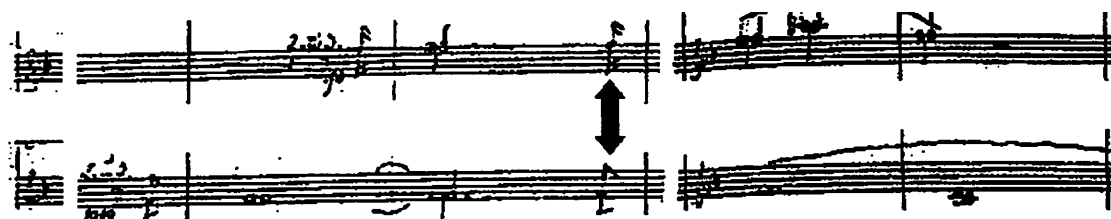
譜例②a 自筆譜・第3楽章90小節～ ppがffに突然変わる



譜例②b レーヴェ版・第3楽章90小節～ ppからクレッシェンドしてffになる

・衝突するリズム

ブルックナーのオリジナルの楽譜にはわざとリズムがずれるように書かれている部分があるが、これをレーヴェはリズムの衝突を回避するように編曲している（譜例③）。レーヴェ版は洗練された印象を与えるが、ブルックナーのオリジナルはリズムの衝突がもたらす緊張感が魅力的だ。



譜例③a 自筆譜・第1楽章229小節～ 16分音符と8分音符が同時に鳴らされる。



譜例③b レーヴェ版・第1楽章229小節～ 16分音符に統一してリズムの衝突を回避している

・単純さ、簡潔さ

ブルックナーのオリジナルのスケルツォは、「スケルツォ主部—トリオ—スケルツォ主部をそのままダ・カーポ」という、あきれるほどに単純な3部形式になっている。レーヴェは単純なダ・カーポになるのを嫌い、最初のスケルツォ主部とダ・カーポ後のスケルツォ主部に変化をつけている。

また、ブルックナーの楽器使用法は当時としてはきわめてシンプルなものであった。弦楽器と管楽器の音をブレンドすることはあまりせず、弦楽器だけの、管楽器だけの「素材の魅力」を前面に出したオーケストレーションになっている。レーヴェの編曲は色彩感が豊かだが、オリジナルの素朴な魅力を失っている。

このように、ブルックナーの作品は、簡潔で素朴な面がある一方で、強弱変化やリズムには過激で豪快な表現も見られる。つまり、相反する性格を併呑した、破格の幅を持った音楽なのである。そして、こうしたブルックナーの音楽の特性は「歪んだ真珠」という本来の意味でのバロックを感じさせる。こうしたバロック的な特徴はブルックナーの大きな魅力なのだが、古典的な均整美ともロマン派の流麗さとも相容れないブルックナーの交響曲に初めて触れた当時の聴衆は面食らったことだろう。晩年のモーツァルトと同様、時代の趣向を超越した個性を発揮する天才が憂き目に会うのは宿命なのかもしれない。

また、ブルックナーの交響曲は「長すぎる」「単調な繰り返しが多い」という非難も受けていた。しかし、この「長さ」もブルックナーならではの魅力なのである。映画が好きな方は黒澤明監督の『羅生門』を思い出してほしい。志村喬が山の中を歩く、ただそれだけを延々と長く映すシーンに度肝を抜かれた方も居られるだろう。この長く単調なシーンが来るべき事件に向けての興奮を否応無く高める効果を上げていたからだ。ブルックナーの「長さ」もこれに似た効果を上げている。長い長い繰り返しの中で高められた興奮の末にもたらされる壮大なクライマックスは比類の無い感動を与えてくれる。

今日では、こうしたブルックナー独自の魅力が認知され、ブルックナーが書いたオリジナルの版で演奏するのが常識になっている。勿論、本日の私たちの演奏もブルックナーのオリジナルの楽譜を使用している。

作風転換期の作品

ブルックナー最後の作品である第9交響曲であるが、最後の作品でありながらも「ブルックナーの音楽の集大成」といった形容をされることは意外に少ない。ブルックナー愛好者を自認する人たちの評価も分かれる。僕のような熱烈な愛好者がいる一方で、「9番は好きになれない」と言う人も確実にいる。指揮者を見ても、ベームのようにブルックナーを頻繁に演奏していながら9番だけはレパートリーから外していた指揮者がいる一方で、バーンスタインのようにブルックナーは9番しか振らなかったという人もいる。ブルックナーの作品の中でも9番は特殊な作品なのだ。「9番を除けば8番が最高傑作」という言い方がしばしばなされるが、「9番を除く」理由は単に未完成であるということだけではないのである。

ブルックナーの交響曲の第1楽章は3つの主題を持つソナタ形式が基本であり、この点は9番も例外ではない。しかし、9番は第1主題部が極めて長大なものになり、まるでアダージョの序奏部がそのまま第1主題に吸収されてしまったかようになっていく。長大なこの第1主題部は、茫漠としたカオスから始まった後、激しい高揚を見せ、圧倒的なエネルギーを持つクライマックスになだれ込む、ブルックナーとしては異例な劇的な音楽である。このクライマックスの主題は、混沌とした序奏部分とは対照的な全オーケストラのユニゾンであり、モーツァルト40番のフィナーレと並び賞されるべきユニゾンを効果的に使った名場面と言えよう。官能的な歌を聞かせる第2主題、程良い推進力を持った第3主題という構成もブルックナーの常套手段だが、そのいずれも、他のどの作品にも聴かれないような破滅の予感を漂わせている。そして、その予感は徐々に現実のものとなる。ホルンが城壁も崩さんばかりに吼えたる再現部、トランペットが硫黄の炎のように閃光を発するコーダを経て、最後は長調でも短調でもない不気味な響きの洪水に飲み込まれる。

ブルックナーのスケルツォは、農民たちの陽気な踊りを思わせる快活なスケルツォ主部と穏やかで牧歌的なトリオが鮮明に対比されるのが常套手段だったが、第2楽章におかれた9番のスケルツォは全く異なる表情を持つ。どこか不安を感じさせる木管の前衛的な和音に導かれて、不協和音を連打し続けるという悪魔的な主題が襲い掛かってくる。旋律ではなくリズムのみで描かれたこの音楽はストラヴィンスキーの『春の祭典』を先取りしている。陽気な舞曲風のスケルツォの面影は、オーボエのソロなどにわずかに垣間見られるに過ぎない。トリオもブルックナーでは前例の無い疾走するような音楽である。木管が鳥のように轉るが、優雅というよりはむしろ哀しさと不安とを感じさせる。

アダージョの第3楽章は先行楽章とは対照的な淡々とした音楽であり、天使のようなフルートのソロに導かれて折り目正しく音楽が展開していく。弦楽器の美しさを最大限に引き出した簡潔なオーケストレーションと、聴く者の心に直接訴えてくる雄渾な旋律は、紛れも無くブルックナーのアダージョである。しかし、クライマックスは今までのブルックナー作品には全く見られなかった凄まじい光景だ。激しくリズムが衝突する中、金管が災いをもたらすラッパのように吼え、現代作曲家ペンデレツキを先取りしたような凄惨で破滅的な不協和音が叩きつけられる。まるで、血のあらわれが降り、炎が地上を焼き尽くす光景を見るようだ。しかし、この最後の審判を思わせる戦慄の破局の後には、再び静謐を取り戻す。ブルックナーは死期が近いことを自覚していたのだがそのためだろうか、コーダでは自身の過去の作品を回顧するように引用している。中でも重要なのはミサ曲第1番からの引用であり、「ミゼレーレ（憐れみたまえ）」の旋律が静かに歌われる（譜例④）。第1主題と第2主題をつなぐホルンの旋律が「生からの別れ」と名付けられていることとあわせて考えると、この第3楽章は死を意識した楽章と言って良いだろう。死を前にしたブルックナーが神への思いを告白しているようだ。

完成されなかった第4楽章では、悲劇的で緊張感に満ちたフーガと、主の万軍が進軍する様を思わせる堂々とした行進曲、そして天国的な美しさの中にもどこか哀しさを漂わせたコーラルとが複雑に絡み合い、最後は神を賛美するにふさわしい詠唱風の旋律によって結ばれる予定であった。



譜例④ 右・第3楽章 219 小節～



左・ミサ曲第1番二短調のミゼレーレ主題

このようにして9番の特異性を見ていくと、ブルックナーが自らの作風に新風を吹き込み、新たなブルックナー像を打ち立てようとしていたことを感じることができる。言わば、第9交響曲はブルックナーの作風転換期の作品と言えるのだ。

それにしても、死を目前にしているにもかかわらず、なおも作風を転換し新しい境地に踏み出そうとするブルックナーの創作意欲はなんと凄まじいことだろう。この時期、ブルックナーが歩行も困難なほどに衰弱し、何度も危篤状態に陥りながらもそのたびに蘇生しては作曲を続けていたことを思うと、畏れさえ感じる。我々の音楽に懸ける思いをもってしても、このブルックナーの音楽への思い・神への思いに至ることができるとは到底思えない。それでも、無謀と知りながらも全力を尽くして曲に立ち向かい、この曲が持つ至高の境地に少しでも近づきたい、そんな思いを込めて演奏します。

(曲目推薦者：Tp. 遠藤 啓輔)

ブルックナー賛

・「音楽をピュアーにピュアーに聴いていった先に、ブルックナーとの出会いがあるのではないのでしょうか。そういう意味でブルックナーこそ究極のクラシック音楽だと思います。」(若杉弘／指揮者)

・「シンフォニー・オーケストラというものは、最終的にはブルックナーを演奏するために存在しており、ブルックナーをきちんと演奏できるかどうか、ひとつのオーケストラの究極の価値判断であると思っている。ブルックナーの音楽はすべてが純粋で澄み切っており、どこにもごまかしのできる余地がない。あらゆる音は巨大な伽藍を構成する一部分であり、個人の気まぐれな感情のゆらぎや、技術の勝手な都合でいささかもゆるがせにすることは許されない。それでいて音楽の表情は限りなく優しく、厳しく、暖かく、そして無限に美しい。」(茂木大輔／オーボエ奏者)

・「ブルックナーを指揮するときにはいつも素晴らしい、まさに感動的な体験です。特に深々としたアダージョは最も華麗で美しい転調をみせます。これ以外の作曲家からは見つけ出せないブルックナーだけの世界です。全てが超越的なのです。表面的なものは一切なく奥行きと美しさがあります。宇宙とつながっている感じなのです。栄光というか、神の存在を感じます。」(スタニスラフ・スコロヴァチェフスキ／指揮者)

・「ブルックナーは全欧州の歴史の中でもきわめて稀にしか出現しない天才の中の一人です。彼に課された運命は、超自然的なものを現実化し、神的なものを奪い取って、我々人間的世界の中へ持ちこみ、我々の世界に植えつけることでありました。魔神との戦いの中にも、また至高の浄福を歌う響きの中にも、——この人の全思想と観念とは彼の内部の神なるものに向って、彼の上に司宰する神々に向ってその深遠な情感をつくして捧げられています。彼は決してただ音楽家であるというようなものではありません。」(ヴィルヘルム・フルトヴェングラー／作曲家)

・「ブルックナーは交響曲の魂が集まっている塔のような存在だといえます。交響曲におけるサウンドの形成を博覧するような瞑想的な特徴と、塔のようにそびえ立つ力を持っているのです。」(エリアフ・インバル／指揮者)

・「ブルックナー最晩年の語法は、一見、地形も速さも異なる流れに見えながら、紛れもなく同一の大河として繋がっているということを確認させずにはおかない。」(金子建志／指揮者)

・「彼(ブルックナー)の曲の神聖な終わりは、すべて来世への希望であり、救われることや転生への希望である。神の光の中に！ 彼だけがそう書いた。」(セルジュ・チェリビダッケ／指揮者)

・「ブルックナーがほかの作曲家と違うところはどこか、一言で言うと、永遠とか神というものを表現したい、自分のものにしたい、ということを考えてきた人の音楽だと思う。そして、自分がどこから出てきたか、みたいなのを肯定してくれる音楽がそこにはある。そういう音楽を書いた人がほかにはあんまりなくてね。…交響曲の8番というのはどこをとってもものすごく美しい。しかし8番は9番に向かう交響曲なんですね。だから8番には物足りなさを感じる。これがまたいい。人間の無限の可能性を感じさせてくれる。」(井上道義／指揮者)

・「ブルックナーは、彼の時代のどの作曲家よりもずっと私を驚かせる、まるで彼のアンテナは20世紀にまで届いているようだ。第二次ウィーン楽派の基礎を築いたのはマーラーだという人がいるけれども、それはむしろブルックナーの方により当てはまると私は思っている。」(ニコラウス・アーノンクール／指揮者)

・「第九番は別格である。ここでブルックナーは、ベートーヴェンと20世紀を媒介しているようである。スケルツォでトリスタン和音、アダージョのクライマックスの最後でクラスターの響きが使用される。しかし、次代を預言する独特な和声法が、少しも実験的な感じを与えない。彼岸の響きとも言おうか。」(土田英三郎／音楽学者)

・「第九はブルックナーが書いた最後の交響曲であり、内容の深さでは随一といえよう。あまりにも深すぎて、僕のような熱烈なブルックナー信奉者でも、聴く前には覚悟が必要だ。あの崇高な世界に連れ去られるのがこわいのである。」(宇野功芳／指揮者)

・「(ブルックナーの作品群を山脈にたとえれば、第8交響曲は)主峰と言っていていいでしょうね。ある意味では音楽的に9番の方がもっと深い山であるとも言えますけども。」(朝比奈隆／指揮者)

・「ほとんどあり得ないと言ってよいが、この曲(ブルックナーの9番)を上手く指揮できた幸せ者がいたら、その時は遙か彼方の星空を通して何かをかいま見て神の偉大さを感じることができるだろう。これがアントン・ブルックナーの音楽というものだよ。」(ギュンター・ヴァント／指揮者)

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員 ご芳名

| | | |
|---------|---------|---------|
| 村上 治子様 | 杉本 里香様 | 越後 千代様 |
| 川野 浩之様 | 大八木 文人様 | 西山 恵子様 |
| 岩佐 聖子様 | 松村 正人様 | 後藤 恭子様 |
| 田中 直子様 | 南方 一晃様 | 高瀬 博章様 |
| 村山 義尚様 | 政岡 潤平様 | 渡辺 一真様 |
| 村上 明日香様 | 政岡 節男様 | 渡辺 由加里様 |
| 渡辺 真人様 | 政岡 晶子様 | 渡辺 晴菜様 |
| 渡辺 和美様 | 津田 篤太郎様 | 河上 由香里様 |

今年4月に発足しました「友の会」は、現在、上記会員の皆様方よりご支援いただいております。

(ご芳名の掲載は、2002年11月18日手続き完了分までとさせていただきます。)

♪ アンケート回答への回答

前回(第11回定期演奏会)もアンケートへたくさんのご意見をいただき、ありがとうございました。前回アンケートから目だった二点を抽出しました。

1、アンコールが良かった。

これはかなりの数の方に書いていただきました。ありがとうございます。前回、アンコールとして演奏した曲は、バルトーク作曲による「トランシルヴァニア舞曲」というあまり知られていない曲で、団員の中でも知る人は少数でした。某団員の紹介があり、皆でCDを聞いたりして、「これは面白い曲だ」と意見が一致し、急遽ハンガリーから譜面を取り寄せ、本番1月ほど前から練習したのです。アンコールまで有名でない曲で固めることに不安があったのですがアンケートでの評判を読んで団員一同ほっとしましたし、うれしく思いました。

残念ながら、今回はプログラムが長い上に静かに終わる曲ですので、アンコールは演奏しないと思いますが、今後の演奏会でも是非アンコールについてのご意見をお寄せください。

2、アンケート用紙とともに鉛筆を用意してほしい。

予算の関係上鉛筆を配るのは難しいんです。申し訳ありません。アンケートを書く場所や鉛筆の確保についてすこしでも改善できるよう、相談してみますね。

今回もアンケートへのご記入、是非よろしくお願ひします。(Vn. 川島 武士)

印刷のことなら

大地社

〒602-0858

京都市上京区河原町通荒神口上ル二筋目東入ル

TEL (075) 231-1727(代)

FAX (075) 256-4604

都ホテル・新都ホテル専属

岐陽館

小林祐史写場

(駐車場有り)

〒604-0991 京都市中京区寺町通丸太町下ル

電話 (075) 231-1471

FAX (075) 231-1471

京都フィロムジカ管弦楽団

Philomusica Orchester Kyoto

Konzertmeister

天澤 天二郎

Violinen

天澤 天二郎

飯島 光一朗

飯田 俊也

越後 美和

荻野 衣美子

小幡 拓也

川島 仁子

川島 武士

須賀 みな子

田村 うらら

千熊 由紀子

津田 和子

中島 円

西村 浩輔

西村 祐司

Saskia Niemeyer

相澤 悠※

赤松 真子※

磯貝 文彦※

井上 史※

井村 有里※

大八木 文人※

奥田 美抄※

高橋 広※

田村 豪主※

久富 望※

栢田 亜紀子※

Bratschen

河村 幸枝

篠崎 淳

下川 雅弘

瀬尾 倫代

松浦 淳司

上田 三保子※

鶴飼 大介※

田中 義浩※

中村 真央※

平石 美緒※

Violoncelli

小川 優香

小野田 税

菊地 涼

小松 正明

多田 進

奥田 真里恵※

星 衛※

吉田 健※

Kontrabässe

今城 和久

河原 豊

名坂 美香

井上 ゆか※

計盛 創※

塩谷 亮祐※

山岸 寛志※

Flöten

江藤 佳美

加藤 勇仁

松村 朋美

(Piccolo)

Oboen

中西 充弥

山出 涼子

崗崎 いつ子※

Klarinetten

田中 慎一郎

野田 瑠美

西 景子※

森 敦弘※

Fagotte

塚田 英城

溝辺 澄子※

清水 友恵※

Hörner

芦原 俊平

片山 真吾

木下 洋輔

坂口 裕志

長岡 武志

名取 良

(Tenor-Tuba)

安田 聖

吉野 文彦

(Baß-Tuba)

岩井 康祐※

呉 哲庸※

(Tenor-Tuba)

白木 尚子※

(Baß-Tuba)

Trompeten

遠藤 啓輔

渡辺 美智子

天野 修作※

南出 和彦※

Posaunen

石松 康介

宮下 秀行

林 和幸※

Kontra-Baßtuba

塚田 淳

Pauken

永野 貴子

Schlagzeug

大江 雅子※

陸田 典和※

※印：客演奏者

顧問

和田 之宏

団長

長岡 武志

弦トレーナー 吉野 美穂

京都市立芸大卒。ヴァイオリンを木村直子、岸辺百百雄、室内楽を種田直之、河野文昭、久合田緑の各氏に師事。

管トレーナー 山崎 雅夫

京都大学卒。京都大学交響楽団金管・打楽器トレーナー。トランペットをC、マクベス、A、ハーゼス、M、アンドレの各氏に師事。

木管トレーナー 片寄 伸也

大阪教育大学卒業。シュトゥットガルト音楽大学、トロッシンゲン音楽大学各大学院終了。現在、フリーランスのファゴット奏者として在阪のオケなどにて客演奏者を務める傍ら、ソロ・室内楽でも活躍中。

♪ 京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ ♪

♪ 第13回定期演奏会 ♪

2003年6月1日(日) 午後1:00開場 午後2:00開演 京都府長岡京記念文化会館

シューマン/「マンフレッド」序曲

プロコフィエフ/交響曲第1番「古典交響曲」

ニールセン/交響曲第3番「広がり」

指揮：イヴ・ラフォンテーヌ

♪ 新入団員随時募集中 ♪

募集パート：ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス

オーボエ、クラリネット、ファゴット、トランペット、トロンボーン

※管楽器はオーディションがあります。

※コントラバスは団所有の楽器があるため、楽器に関しては相談に応じます。

詳しくはお問合せください。

Tel. 090-8163-4626 (津田)

E-mail philo_recruit@artdam.uji.kyoto.jp

♪ 「友の会」会員随時募集中 ♪

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています。

【年会費】1口 1,000円 【期間】ご入会いただいた月より1年間

【特典】1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待

2. その他演奏活動のご案内

3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せは、下記までお願いいたします。

Tel&Fax 075-495-1831 (松村)

E-mail philo_tomo@artdam.uji.kyoto.jp

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ <http://www.artdam.uji.kyoto.jp/philos/>

クラシック音楽の海外公演・国際交流

海外での公演・国際交流は、現地でのマネジメントが大切です。

弊社は日本のオーケストラの海外公演・国際交流を、真の意味で成功させて参りました。

海外公演・国際交流のお手伝いはおまかせください。

最近の海外公演実績

岡山県桃太郎少年合唱団ドイツ公演98年8月(レーゲンスブルク大聖堂他)

同志社大学交響楽団ヨーロッパ公演98年3月(ミュンヘン・ヘラクレスザール他)

京都市民管弦楽団ヨーロッパ公演99年5月(ウィーン・ムジークフェライン大ホール他)

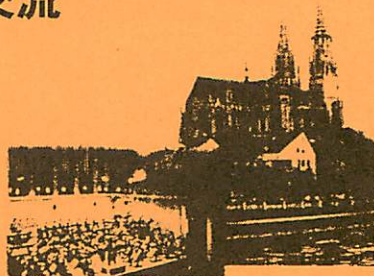
彦根市ベルリン第九演奏会実行委員会99年12月31日(ベルリン・SFB放送大ホール)

ルーマニア トゥルグ・ムレシュ パッハ生誕200年記念コンサート2000年5月(文化宮殿)

同志社大学交響楽団ヨーロッパ公演2001年3月(グラーツ・ステファニーザール 他)

ホームページ：<http://www.mitsuma.com/>

協力会社：ルフトハンザドイツ航空会社、全日空、JTB、近畿日本ツーリスト、AIU保険会社



(社)日本クラシック音楽事業協会会員

(株)ミツマ・ミュージックプロダクツ

〒605-0009 京都市東山区三条通大橋東入ル大橋町102 田中ビル5F Tel.075-761-1213 Fax.075-752-5568